

第五章 福生の商工業

第一節 商業

駅前商店街の形成 福生市内の商業について戦前からの消長を全域についてみようとするが、資料の制約上、福生駅前商店街を中心に記述する。市の商業について考えると、最大の転機となったものは、なんといっても

青梅鉄道の開通である。

明治二十七年（八四）一月一九日の青梅線の開通にともない、福生村に福生駅が開設された。これにより今までの物資の集散地の中心が青梅や五日市であったものが、とくに秋川、平井川筋の物資が福生駅に集まることになった。加えて、瑞穂や狭山方面から東京方面へも至近となったため、そちらからも集まるようになるのである。このようにして、交通体系が大きく変わり、福生駅周辺は商工業活動が発展する条件が備わってくる。

明治二十七年、早くも内田近之助荒物店が開業（現コンビニエンスストア）、つづいて三五年、笹本金作商店が開業、さらに長沢や加美、永田、中福生など福生村内の農家から分家して店舗を構える動きが出てきた。さらに、駅周辺の利点に着目して、近在他村からも進出してくる者が増え、西多摩の要衝として都市的様相を整えてくる。

明治四十二年四月一日、それまで加美の宮本にあった東多摩小学校が福生小学校と改称され、現在地に移築、開校さ

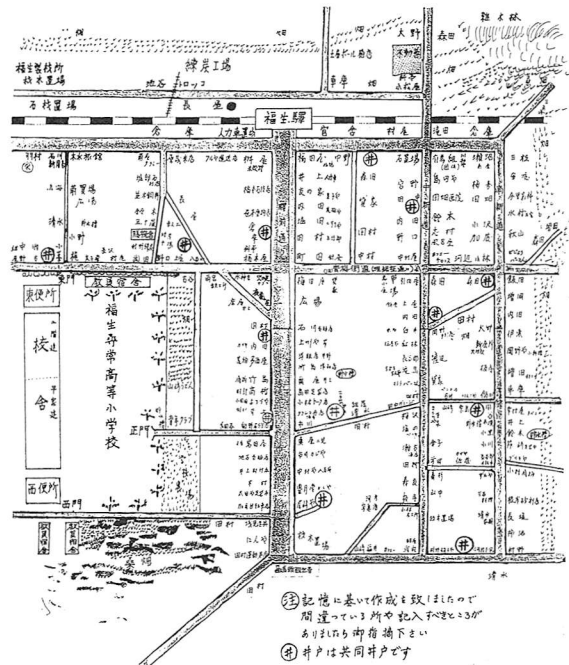


図 VI-37 昭和初期の停車場付近図（昭士会作図）

ら昭和一二、三年のころであったが、わが国が次第に戦時体制に移っていったため出店数もだんだん減り、ついになくなってしまった。

共同井戸

福生駅前の停車場地区が開かれていくとき、大きな役割を果したものに共同井戸がある。現在でこそ水道が敷設されているが、当時は家を新築する場合、先ず水を確保するために井戸を掘る必要があっ

れるに及んで、それまで福生村の商業活動の中心であった旧五日市街道やマルミ運動具店から西の宿橋に通ずる道路沿いから「停車場」とよばれた駅前へと拠点が移行する契機となった。

だるま市

そのころの福生駅前通りでは、「だるま市」が開かれていた。

駅前広場はまだなかったが、毎年一月四日、道の両側に一五、六軒のおもちや屋、本屋、電気あめ屋、だんご屋などがずらりと並んだ。このほか、駅前には二月二八日の三月雛市、四月二八日の五月雛市、一二月二八日の歳の瀬市などがあり、村内や近在の人たちでにぎわった。この「だるま市」が華やかな時代は、大正時代か

た。とくに、福生駅周辺は、どこでも掘れば水が出るというものではなく、良好な水脈を捜して掘ることが必要で、しかも帯水層が深いので、井戸も深く掘る必要があり、経済的にも大変であった。そのため、このようにして掘られた井戸は、隣近所が数戸で利用することになったのである。これが共同井戸である。参考までに、昭和初期の停車場地区にあった主な施設と共同井戸を復元すべく作製した地図があるので掲げておく(図VI-37)。

馬力輸送

戦前の福生駅周辺は、秋田県・新潟県方面からきた米穀類や肥料その他の物資、五日市方面からくる木材、木炭、瑞穂や埼玉県方面からの茶などの産物を、各地へ輸送するための馬力輸送の拠点となっていた。そのさきがけとなったのは、明治四〇年(一九一七)、駅前に榊屋商會が開店したことである。加えて、翌年の明治四一年、青梅鐵道が輕便鐵道から現在の軌道に改修され、輸送力が一段と増強されてくるにつれて、志村運送店、梅田運送店が開店する。

当時は、トラックがまだなく、道路上の大量輸送手段としては馬力に頼らざるを得ない時代であった。馬が木製二輪の荷車を引っぱり、馬方一人が馬の手綱を持って馬の先に立って歩いて行く、牧歌的な時代であった。最盛期には、このような馬方が三〇人も駅前周辺に集まった、と古老の話である。さらに駅前には、この馬方をお客にした居酒屋、飲食店があり、蹄鉄屋もあった。なお、そのころの福生の産物としては、多摩川から採掘された砂利があったが、これも昭和二年(一九二七)に敷設された砂利線だけでは間に合わず、馬力輸送で福生駅まで運ばれたのである。

明治、大正 時代の商業 昭和三五年発刊された『福生町誌』によって、明治、大正時代の商業のようすを記述してみる。それによると、明治二九年に、福生村では一一四軒の商店があった。内訳は、多いものから順に菓子、糸

繭、荒物、穀類、青物、その他であり、養蚕業が盛んであった地域性を反映し、糸繭商が三〇戸(二六パーセント)

であることが目を引く。

大正時代に入り、商店数は増加する。すなわち、大正一五年（一九二六）には一六九軒と、明治二十九年の一・五倍の増加である。しかし、養蚕業の不振の影響を受けて、明治時代に多かった糸繭商が極端に減少し、綿糸、毛糸、織物、被服、車両、燃料などの業種が現われてきている。さらに飲食店が一二軒できたことで、駅前の停車場地区が、次第に商店街としての形態をもつようになってきていることをうかがわせる。車両というのは、運送用としての荷車の需要が多かったことによるものであり、荷車販売業が七軒あったとされる。時代の特色を写しているもので面白い。

また、明治二十九年のグラフには表わされていない、鮮魚を取り扱う「魚介」が五軒もできていることから、交通機関のスピードアップ化がつかめるであろう。さらに、綿糸、毛糸、織物、被服、燃料商などの出現は、福生村が周辺地域の商業中心地として、都市的様相を呈してきたことの証左であろう。両時代を通じ、菓子販売業がトップを占め

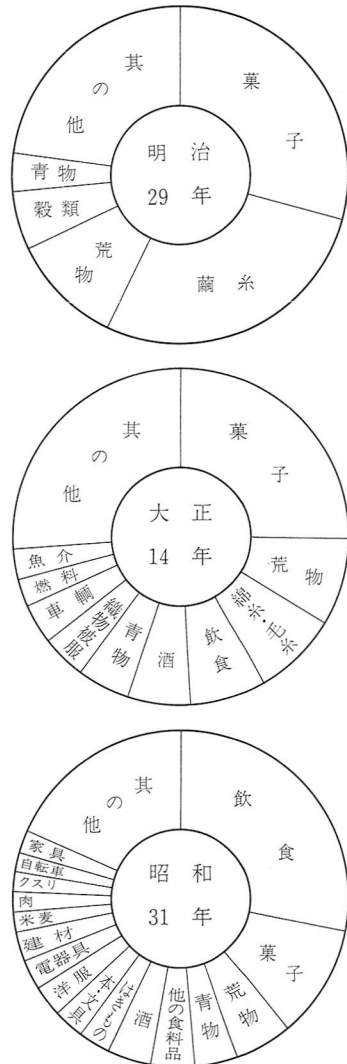


図 VI-38 福生の商業の変遷
 (『福生町誌』より転載)

ている。いつの時代でも、菓子類は子どもたちの楽しみの一つであることに加え、この時代は大人たちにも茶の友として、必需品であったことがわかうというものである。

商店街の変質

福生市内の商店街の発展をふりかえってみると、いくつかの時期に区分できようである。

すなわち、第一期は青梅鉄道の開通以後昭和一四、五年のころまでで、この時期に商店が開業し、駅前前の商店街としての一画が形成されはじめた時期である。

第二期は陸軍航空整備学校ができた一四、五年から二五、六年のころまでである。この時期は軍関係者や基地従業員が増加し、直接、間接に町はその恩恵を受けることになった。

第三期は二六ころから四七ころまで。多くの人々により基地依存の町からの脱皮が叫ばれ、努力された時代である。福生七夕まつりが催されるようになったのは、その努力の表われの一つであり、三〇年九月、三多摩地区ではじめての、商店街協同組合が設立されたのもその一つである。

そして第四期は四八年六月、西友ストア福生店が開店してから今日に至るまでの期間である。新規商店の開店が停滞し、客足の流れが変わり、既設商店街の変質が迫られてきている時期である。

七夕まつり

前述したように太平洋戦争後、それまでの横田基地依存の町からの脱皮をするために、いろいろな方が検討されたようであるが、福生商店街の活性化の一つとして七夕まつりが導入された。その経緯について、当時福生町職員であった佐藤三郎が『ふっさ子第二集』に、次のような一文を記しているので引用しながら記述してみる。

昭和二十四、五年頃の福生の商店は、西には老舗の街青梅、南に織物の八王子、東には交通の便がよく、急速

に延びてきた立川があり、それらの商店街とを比較いたしますと、どうしても見劣りがし、実際に消費者もそちらの方へ流れて行く傾向にありました。この流れはなんとしても喰止めなければなりません。その打開策として、福生という地名を売り込み、福生の商店が親しまれ、『福生といえは何々』というキャッチフレーズを作り、福生をイメージアップさせたいということでした。あれこれと関係者で議論しました。不動様の縁日をやろう、芝居はどうだ、のど自慢大会は……等々意見が出ました。決定的な案は出ません。

そこで私が実際に見て非常に感銘をうけたことを話し、提案したのでございます。(略)

以上のことをお話し、七夕祭りを提案し、皆さんの賛同を得ました。

このようにして決まったものの、資料や研究不足すぐには実施できず、近くで昔から有名である埼玉県入間川(狭山市)の役場に問い合わせたりして二年が過ぎてしまう。二六年七月にはいよいよ実施の運びとなるが、ここでふたたび佐藤の文を引用する。

(略) 駅前の商店で結成している中央商栄会が中元売出しのデモンストレーションとして、とうとう七夕祭りを実施することに踏切ったのでございます。この年の七月六日より八日までの三日間、これが福生の七夕祭りの発祥でございます。

七月五日の夕方、町の竹林から伐りだされた竹が、各商店に一本ずつ配られました。二年間も温めてきた夢が明日実現することになったのです。成功か、失敗か。その成否の鍵を握る天候は。その晩は期待と不安とが交錯してとうとう一睡も出来ませんでした。やがて朝になりました。晴れです。天候は上々。竹に色とりどりの短冊や、赤や青のモールが飾り付けられました。浅草の近くの間屋から仕入れてきた規格品です。今から考えるとま

月 日		とき	演 芸 種 目	会 場
七月 九日	七月 八日	昼夜 夜	人形展(一〇日まで) 素人のど自慢大会	銀座通り 第一小学校校庭
	昼	夜	ブラスバンド演奏会 (小中学生)	第一小学校校庭
		夜	日本舞踊	
		夜	日本舞踊 謡曲	

ことに質素な七夕飾りでした。しかし、飾り付けのできあがった竹が各商店に樹てられると、今までの商店街とは違った雰囲気となり、珍しがって人々が見にきてくれました。夜になるとますますたくさんの人出になったのでございます。まず成功でした。

このようにして始まった福生の七夕まつりは、翌年から市内のほかの商店も同調し、福生町全域の商店街が参加することになる。そして二八年には朝日、毎日、読売の三大新聞に関連記事が掲載された。さらに二九年から、青梅線が増発されるようになった。一方、マンネリ化防止のための努力も試みられ、三六年の第一〇回目からは飾り付けも一段と豪華になり、ミス東京パレード、米第五空軍パレード、小学生の鼓笛隊の登場、歌謡ショーが加えられた。さらに四一年、福生音頭が制定された。

参考までに、昭和三六年の催しものを載せてみる。

七月一日							
夜	昼	夜	昼	昼夜	夜	昼	
謡曲	民謡おどり	謡曲	民謡おどり	美術展(一〇日まで)	日本舞踊 謡曲	日本舞踊	ブラスバンド演奏会 (小中学生)
志茂睦会館		第一小学校校庭		信用金庫三階	志茂睦会館		

七夕コンクール

一期日 七月八日 午前一〇時

二 審査方法

審査員が採点し、点数の多いものから順次定めます。

三 賞 推薦 一点 準特選 一席 一点

第1節 商 業

特選一席 一点

二席 一点

同 二席 一点

三席 一点

同 三席 一点

入 選 六席

佳 作 三〇点

四 参加申込み

1 コンクールに参加される方は各商店街会長さんに七月二日までに申し込んで下さい。

2 商店街に属さない方は七月二日までに役場産業課へ申し込んで下さい。

3 地区別

第一地区 中央商栄会

第二地区 銀座通り商栄会

第三地区 富士見通り商栄会、牛浜商栄会、栄通り商栄会、及びその他地区

素人のど自慢

七夕まつりの一環として行われる「素人のど自慢大会」の出演希望者の申し込みを、つぎのように受付けますので多数の方の御参加を御願いたします。

○開催日 七月八日 午後七時より

○開催場所 福生第一小学校校庭

○申し込み 福生町役場産業課、または福生商協事務所

。締め切り

七月二日まで

。その他

出演者には全員に賞品を贈呈いたします。他町村の方も歓迎します。

七夕写真コンクール

一 題材

福生七夕まつりをテーマとしたスナップ、風景その他観光宣伝に効果のあるもの

二 撮影区域

福生町内

三 作品

1 一般の部 四ツ切(白黒)

2 カラーの部 カラースライド(三五判または六×六判枠入)

四 賞

一般の部

推薦

一点 杯及び副賞一万円

特選

一点 杯及び副賞五千元

準特選一席

一点 杯及び賞金二千元

二席 一点

一千円

三席 一点

一千円

入選 一二点

杯及び副賞各五〇〇円

佳作 五〇点

富士フィルム賞外

カラーの部

推薦

一点 杯及び副賞五千元

特選一席 一点

杯及び副賞二千円

” 二席 一点

” ”

入 選 一〇点

富士フィルム賞外

五、切期日 七月三十一日

六、送り先 福生町役場産業課

七、発表 新聞誌上または入賞者にハガキで通知します。

福生町商店街協同組合 七夕まつりを目玉行事として、その他福生市域における商業活動の振興に、大きな役割を果たしてきたものに、福生町商店街協同組合がある。

この商協が発足したのは昭和三〇年（一九五五）九月、商店の経営に必要な金融、経営研究、税務会計研究、店員指導などの研究を進めるとともに、中元・歳暮の大売出し、七月の七夕まつりなどの計画、実施を推進している。特筆すべきは、この商協は三多摩地域ではじめてのものであり、組織、運営が良いことから、モデル組合として国、都から表彰された実績をもっている。そのため、近隣町村のみならず、都区内や近県からも視察にくるほどであった。

昭和三〇年代の商店街 昭和三〇年代、福生町の商店街は近隣町村から多くの買物客を引きつけ、活況を呈していた時代である。このころの買物状況調査結果が、昭和三八年一月一日号の「福生町広報」に掲載されており、当時の商店街について、知ることのできる資料なのでここでとりあげたい。この調査は、昭和三七年、福生町産業課と

商工会が調べたもので、近隣市町村の消費者が、福生町の商店街についてどのような意識をもっているかなどを、調べようとしたものである。調査対象者は西多摩郡内の町村や青梅市、昭島市に居住している二〇歳以上の男女で、回



図 VI-39 福生駅前商店街（昭和35年）

答者数は一二〇六人、調査期間は三十七年八月一日から一五日までの一五日間であった。次に、同広報に掲載された調査結果のまとめを掲げてみる。

福生の商圈

福生町の商店街で買物をしている人は、福生町民の七一・四パーセント、羽村町の人は四二・〇パーセント、秋多町では四四・六パーセントで非常に多く、日の出村・五日市町・瑞穂町でも約二〇パーセントの人たちである。当時はまだ自家用車の普及が少なく、バス、鉄道が主な交通機関であった時代である。福生の商店街は、福生駅を中心としたバス路線網の関係で、羽村町・秋多町が商圈となっており、五日市町・檜原村や瑞穂町も二次的な商業圏内にあることがわかる。

この調査では、福生町内でどんな品物を買っているかについても調べているが、それによると、洋品呉服類、食品類、雑貨金物類となっており、さらに福生の商店が買いい点として、①交通の便が良いこと、②品物が豊富であること、③値段が安いこと、④信用がもてること、⑤親しみがもてること、など商店街の感じが良いこと。逆に買にくい点としては、営業時間が短いこと、商店街に楽しみがもてないことなどがあげられている。

次に各市町村の商店が吸収する購買力についても調べている。

調査対象となった一〇市町村のうち、他市町村の消費者（購買力）を地元（自市町村）に吸収しているのは、福生町が羽村・瑞穂・秋多・日の出の四町村、青梅市は奥多摩町の一部となっていて、福生町が近隣市町村の中心的な場

第1節 商 業

表 VI-49 福生町での買物調査

市町村名	いつもしている		たまにする		全然しない	
	回答数	率	回答数	率	回答数	率
福 生 町	105	71.4%	38	25.9%	4	2.7%
羽 村 町	29	42.0	39	56.9	1	1.5
瑞 穂 町	8	17.0	35	74.5	4	8.5
秋 多 町	42	44.6	40	42.6	12	12.8
日の出村	11	22.9	31	64.6	6	12.5
五日市町	18	20.0	61	67.8	11	12.2
檜 原 村	3	15.8	8	42.1	8	42.1
奥多摩町	5	5.7	66	75.9	16	18.4
青 梅 市	31	10.8	195	68.2	60	21.0
昭 島 市	4	5.5	140	54.7	102	39.8

(昭和38年1月1日「福生町広報」より転載)

表 VI-50 買物地の状況調査

市町村名	住居地	福生	青梅	昭島	立川	八王子	武蔵野	都内	デパート	その他
福 生 町	60.2	/	1.0	4.4	8.8	3.3	1.3	10.2	8.6	2.2
羽 村 町	24.7	39.5	11.0	0.3	6.3	0.5	0.9	4.7	8.9	3.2
瑞 穂 町	29.2	36.9	11.7	—	8.8	4.8	2.5	1.2	4.8	0.1
秋 多 町	16.7	44.4	3.6	0.8	6.0	9.2	0.3	3.6	10.5	4.9
日の出村	27.2	28.4	11.9	1.0	7.2	8.5	1.0	3.4	4.6	6.8
五日市町	39.4	18.3	2.2	0.5	11.6	10.2	—	2.6	7.9	7.3
檜 原 村	24.3	10.0	2.1	—	5.0	27.2	—	2.1	2.9	26.4
奥多摩町	28.3	13.5	36.2	—	4.5	1.3	0.5	4.2	7.2	4.0
青 梅 市	63.8	13.4	/	0.6	5.9	0.5	0.7	5.0	8.4	1.7
昭 島 市	34.2	8.6	0.3	/	30.6	4.1	1.1	6.4	13.5	1.2

(昭和38年1月1日「福生町広報」より転載)

所にあることがわかる。これは、地理的条件に恵まれていることが大きな要因となっている。よう、立川市やデパートなどが平均した割合でお客を集めていることは今後注意を要するところであろう。

以上のようによまてているが、はたしてその後のモータリゼーションの進行や大型店舗の出現などによる商店街への影響を懸念していることが目をひく。そして、事実、商店街

をとりまく環境は、全国的な傾向として大きく変化していくのである。

大規模小売店の進出

つぎに昭和三〇年以降の福生町商店街に関係のある主な動きを記してみると、次のようなものがある。

昭和30・9 福生商店街協同組合が設立される。

33・10 スーパーマルフジが福生駅前開店

これは、西多摩地域に開店したスーパーマーケットの第一号である。

34 コヤマ百貨店が三階建店舗を新築開店

35 福生商協会館が駅前通りに完成

36・10 福生町商工会館事務所完成

39・2 映画館ニュー福生・テアトル福生閉館

戦後の教養娯楽施設として営業し、商店街に買物客を引きつける施設ともなっていたものであった。

42 スーパーマルフジ加美平店が開店

44・5 スーパーマルフジ銀座店が開店

10 スーパー稲毛屋本町店が開店

46・9 ヤサカ福生店が加美平に開店

10 石川呉服店改築

47・10 松の湯が開店

48・6 西友ストア福生店が開店

この西友ストア福生店の開店は、福生駅前商店街にかぎらず、福生市内や近隣の商店街に大きな影響を与えることとなった。すなわち、福生市内についていえば、それまでは福生駅西口駅前を中心とした商店街が買物客を引きつける核的存在であったが、この店の開店により駅東口が発展する端緒となったこと、これまでの商店街では、バス、鉄道が買物客の足となっていたが、西友ストアの出現は車社会に対応し、広い駐車場を併設した新しい方式を取り入れたものであった。今までの商店街が面的広がりを持っていたのに対し、立体的広がりを持つ、いわば立体的な商店街の出現といえるもので、画期的であった。

48・11 長崎屋福生店が開店

52 福生駅に東西を結ぶ自由通路が開通

53・7 福生商工会館が完成

55・6 ハイネス福生マンションが完成

本町地区に九階建五戸の区画を有する高層分譲マンションである。既成市街地にマンションが進出するようになった点が注目される。

60・10 福生駅西口に公営駐車場が完成

61・1 福生駅に橋上駅舎、自由橋が完成

このように、昭和三〇年代からの推移をながめてみると、自家用車の普及、道路網の整備などが進んだことと相まって、大規模小売店の出店が既成の商店街を大きく変質させる要因となっている。これは、単に福生市の商店街にか

表 VI-51 福生市内の大規模小売店舗

区 分	名 称	所 在 地	開 店 日	業 態	主要販売品
第1種	(株) 西 友 (株) 長 崎 屋	東町5-1 福生768	48. 6. 22 48. 11. 28	スーパー スーパー	
第2種	(株) 樹 屋 (株) コ ヤ マ (株) 樹 屋 (株) ヤ サ カ (株) 石 川 (株) 樹 屋 (株) ムラウチホビー (株) ニュー本庄 (株) いなげや (株) ムラウチ (株) セ キ ド	加美平4-2-1 福生1046 本町10 加美平2-4-1 本町118 南田園2-15-1 熊川東206-1 加美平3-17-3 本町54 福生2299-1 北田園2-18-4	42. 5. 10 42. 12. 1 44. 5. 9 46. 9. 1 46. 12. 1 49. 3. 10 53. 7. 28 54. 10. 3 60. 11. 7 H2. 10. 6 H3. 9. 20	スーパー 専門店 スーパー 専門店 " スーパー 専門店 " " 専門店 "	食 料 品 衣 料 品 食 料 品 家庭雑貨 衣 料 品 食 料 品 家庭雑貨 食 料 品 " 電化製品 "

ぎらず、全国的な傾向でもある。今までの商店街が、店ごとに商品が違い、平面的に軒を連ねているのに対し、立体化されたものである。しかも、広い駐車場スペースを備え、近年では同一建物内に駐車場空間を有する大規模店も現われている。買物客にとっては、晴雨、寒暑にかかわらずいかなる状況でも快適に対応できるように、配慮されたものになってきているので、まことに便利である。このようなモータリゼーションの申し子ともいえるべき大規模小売店は、従来のバス路線や鉄道網などの利便性を考慮することなく、広い敷地の入手可能な、道路交通網の便のよい場所に、今後ますます新設されると予想される。

ところで、平成三年三月三十一日現在、福生市内には第一種大規模小売店舗（二三区にあっては三〇〇〇平方メートル、その他の地区では一五〇〇平方メートル以上の店舗面積を有する店舗）が二店、第二種同（店舗面積が五〇〇平方メートルを超える店舗）が一店あり、内訳は上の表のとおりである。

このような厳しい状況下、旧来からの商店街は緊急な対応へ具体的な対策が講じられることが求められている。

第1節 商 業

① 福生商店街(協)	⑧ 福生武蔵野商店街(振)
② 栄通り商業会	⑨ 横田商業会
③ 銀座*	⑩ ひがし*
④ 銀座中央*	⑪ 東口駅前*
⑤ 東銀座通り*	⑫ 本八西*
⑥ 熊川*	⑬ 熊川武蔵野*
⑦ 牛浜*	

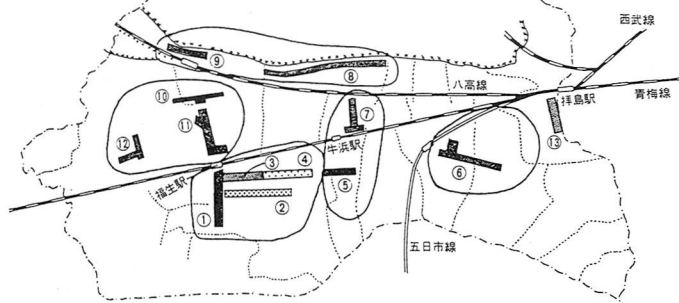


図 VI-40 福生の商店街分布図 (1992年版『福生市商工名鑑』より転載)

最後に平成四年一月現在、福生市内にある一三の商店街の分布状況を上に掲げてみる。

市内の商店数 戦後の市内の商店数、従業員数を見てみよう。
資料の制約上、昭和三十九年以降の動きについて

詳述し、それ以前は三五年発行の『福生町誌』の記事を参照する。

それによると、三三年には市内における商店数は五八七店であった。同誌によると、二七年には約三〇〇店、二九年には四八〇店であったとされるので、二七年にくらべ、三三年は約二倍に増えている。また、「昭和三十三年の統計協会調査によれば、商業戸数五八七戸で、都内八ヶ町村(福生・羽村・瑞穂・五日市・秋多・奥多摩の各町と日の出・檜原の二村)のうち最高をしめている。これは当地が青梅市とともに郡内商業の中心をなしていることを示している。とくに戦後の都市化とともに、交通機関の要地として、その乗降客数の増加などが原因となり、福生町本町、銀座通りを中心として急激に商店が増加している。特に本町通り商店街の規模の大きさは、都心にも負けないほど

表 VI-52 商店数・従業員数の推移 (各年5月1日現在)

年 度		昭和39	43	47	51	54	57	60・61
区 分	商 店 数	695	811	1,126	1,200	1,213	1,069	999
	従業員数	2,046	2,834	4,256	4,491	4,688	4,752	4,656
卸売業	商 店 数	39	32	60	66	58	93	109
	従業員数	204	337	373	393	629	561	670
小売業	商 店 数	455	485	608	702	691	731	640
	従業員数	1,202	1,476	2,595	2,719	2,607	3,212	2,903
飲食店	商 店 数	201	294	408	432	464	241	250
	従業員数	640	1,021	1,288	1,379	1,452	979	1,083

(60年は卸売・小売, 61年は飲食店を調査)「商業統計調査より抜粋」
(元表の一部を抜粋してあるので総数は合わないところもある)

である」と記されている。

昭和三十九年以降の商店数、従業員数の推移は、別表のとおりである。これによると、商店数は三十九年六九五店、四七年一一二六店、五一年一二〇〇店と増えているが、微増であり頭打ちに近い状態となつてゐることを示している。そのことは、前項で述べたように、四八年六月、東口に西友ストアが開店した頃と重複する。大規模小売店の相次ぐ進出や、交通体系の変化が加わり、買物客の動向が変わりつつあるときでもあった。その影響はやがて数字の上でも、はっきりと表われてくる。すなわち、五四年に一二〇〇店の大台は超えたものの、この年がピークで次からは減少に転ずる。そして、六〇、六一年には一〇〇〇店の大台を割り、四〇年代半ばの数に近くなる。

一方、従業員数をみると、昭和三十九年以前の数字はつかめないが、三十九年に二〇四六人であったが、大規模小売店の進出や店舗の大型化を反映し、四七年には四二五六人と二倍以上の増加となる。この傾向は店舗数が減少に転じてからも増加し、ようやく六〇、六一年に微減となつて表われてきた。

表 VI-53 小売店の比較

区 分		昭和 41 年	昭和60, 61年
衣服・身のまわり品	商 店 数	81	92
	従業員数	248	313
飲 食 料 品	商 店 数	186	213
	従業員数	460	1,002
自動車・荷車	商 店 数	15	53
	従業員数	31	352
家具・建具	商 店 数	66	69
	従業員数	169	ㄻ
そ の 他	商 店 数	97	207
	従業員数	326	704

ㄻ は不明

つぎに、この総数の推移を卸、小売、飲食店に分けて見てみよう。

この期間の店数の増加では、卸売業が約三倍、小売業一・四倍、飲食店が一・二倍であり、数の上では小売業の六四〇店にかなわないが、増加率では卸売業がトップである。反対に最低は飲食店である。従業員数の推移でも、ほぼこれと同じようなことがいえる。すなわち、卸売業は約三・三倍で、現在でも増加傾向にあるが、小売業は二・四倍で昭和五七年にピークに達し、近年は減少傾向にある。とくに四〇年から四七年までの増加は目をみはるばかりである。そして飲食店は一・七倍である。ここで特記しておきたいのは、飲食店に関して、このことについては、『福

生町誌』にっぎのように記述されている。

しかし、このような商業の形態は戦後基地の町として発達するにつれ大きく変化した。すなわち、基地依存商業の発達であり、サービスの増加である。特に本地青梅線北側一帯の飲食店街は、基地米軍を対象としており、マバユイばかりのネオンの点滅する街なみと往来する外人の数は基地の町としての様相をきわめてはっきりと示しているものである。飲食店数一六九軒は、人口五万六千の青梅市の一三二軒にくらべれば、きわめて多いとみなければならぬ。

すなわち、基地の町の影響を受けて、いわゆる赤線地区にみられるような飲食店、それも風俗営業関係の店が多いのである。朝鮮戦

表 VI-54 商店数・従業員数の周辺市との比較

() 内は%

	総 数		卸 売 業		小 売 業		飲 食 店		人 口 1,000 人 あたり 店舗数
	商店数	従業員数	商店数	従業員数	商店数	従業員数	商店数	従業員数	
福 生 市	978	5,490	107(11)	638	643(66)	3,511	228(23)	1,341	17
立 川 市	3,056	21,062	571(19)	6,393	1,842(60)	10,322	643(21)	4,347	20
武蔵野市	2,995	20,253	252(9)	1,805	1,924(64)	11,885	819(27)	6,563	22
青 梅 市	1,736	8,775	174(10)	1,259	1,213(70)	5,717	349(20)	1,799	14
昭 島 市	1,590	9,478	286(18)	2,676	993(62)	4,968	311(20)	1,834	15
秋 川 市	463	2,134	37(8)	175	339(73)	1,592	87(19)	367	9

(卸売・小売業は昭和63.6.1 飲食店は平成元. 10.1)

〔「平成3年度版としとうけい」より〕

争がおこなわれていた昭和二〇年代半ばにくらべ、近年これらの店の客層の日本人化が進んでいるが、店数、従業員数の上にみられる大きな特色であろう。参考までに、五七年、市内の飲食店五四二店のうち酒場、スナックが一六六店(三四パーセント)、食堂、飲食店一九三店(三五パーセント)で、六二年四月の青梅市の四三五店のうち酒場、スナック店六三店、食堂、飲食店一三八店よりはるかに多いことでもわかる。

最後に、昭和六〇、六一年の小売業の内訳をあげておく。なお、参考までに四一年のそれを掲げ、対比してみる。この表で注目すべきは、自動車、荷車、自転車店数および従業員数の激増である。耐久消費財として自家用車が各家庭に入ってきたことが、福生市の商業はもとより、日本人の生活様式や社会そのものを大きく変えた。この数字に日本の社会の激しい変化が凝縮されている。

**周辺地域と
の比較** 立川市や青梅市など、周辺市とくらべた福生市の商業を見
てみよう。

人口一〇〇〇人あたりの店舗数では、武蔵野市の二二店、立川市二〇店にはおよばないものの、青梅市や昭島市を抜いて福生市は商店数が多く、商業地域であることを示している。これを業態別にみると、商業の中で飲

第1節 商 業

表 VI-55 町会別業種別商店ベストテン

飲食店	店数	食料品店	店数	その他の小売店	店数
1 本町八	177	本町八	32	本町七	68
2 本町七	167	中央	27	本町八	58
3 武蔵野	42	牛一	16	中中央	50
4 志茂二	34	鍋一	16	志茂二	39
5 牛二	25	鍋二	16	武蔵野	36
6 本町三	22	本町七	15	牛二	30
7 中中央	22	志茂二	14	原ヶ戸	28
8 牛一	21	武蔵野	14	熊牛	20
9 熊牛	20	熊牛	12	鍋二	20
10 鍋一	20			本町二	19
総 計	653	総 計	217	総 計	487

食店の割合は二七パーセントで、トップの武蔵野市について割合の高い市であることがわかる。なお、卸売業では割合が高いのは、立川市の一八パーセント、昭島市一八パーセントで、小売業では秋川市七三パーセント、青梅市七〇パーセントとなっている。

町会別にみた商店分布 福生市内に現在どのように商店が分布しているのか、昭和六〇年八月に現状確認をしながら、足で歩き調べた結果をつぎに載せてみる。

これによると、飲食店が多いのが本町八丁目町会一七七店、本町七丁目町会一六七店であり際立っている。この二町会で全市の半数を占めているが、これは戦後の福生町の方針で、これら業種のこの地域への集積化が図られたためである。つぎに、食料品店は全市的に散在しており、突出した集積地域はない。さらに、その他の小売業では、本町七、本町八、中央の各町会に多く、福生駅周辺に固まっているようすがうかがえる。

総じて、福生駅をはさんだ周辺地域、福生駅から牛浜駅にかけての銀座通り、牛浜駅近く、拝島駅西口および国道十六号線に沿った地域に商店街が形成されている。

福生市商工会

商工会設立

前史

昭和二〇年八月一日の終戦により、わが国の基幹産業は麻痺し、国民生活はどん底に落ちた。このような状況下、政府は基幹産業の復興と、農業の保護育成を最重要課題ととらえ、施策をおこなってきたため、中小企業はその枠外におかれてきた。当時であっても、中小規模事業者は底辺で国民経済を支えていたのであって、欠かすことのできない存在であった。三〇年代に入り、ますます中小規模事業者には設備、技術などの改善が痛感され、任意の商工会が各地に結成されるようになる。そして、政府や国会へ施策の要望、陳情が繰返される。このような経過を踏んで、三五年五月「商工会の組織等に関する法律」が成立し、同年六月に施行された。これにより全国的に商工会設立の気運が盛りあがった。

当時の西多摩地区にあっては、すべての商工業者が、青梅商工会議所の管轄下におかれていたが、この商工会法の成立により、福生町においても有志商工業者が、町当局に働きかけるなど積極的な運動を展開し、三六年青梅商工会議所より分離、独立することの承認を得、同年一〇月二五日、武陽信用金庫ホールにおいて、福生町商工会創立総会が開かれたのである。このときの会員数は六七四名であった。なお、同年二月一日、東京都知事より設立認可され、西多摩地区では第一号、都下で二三番目の商工会としてスタートした。

商工会の概況

商工会は「その地区内における商工業の総合的な改善発達を図り、特に小規模事業者のための事業活動を促進するための措置を講じ、もって国民経済の健全な発展に寄与する」ことを目的とする地域総合指導団体であり、公益性の強い特殊法人である。活動の基本原則は、営利を目的としてはならないとされ、特定の

第1節 商 業

表 VI-56 福生市商工会会員数の推移

年度	項目	会員数 (人)	商工業 者数	組織率 %	備 考
昭和36年度		674	914	73.7	35年度 事業所統計
37		681	"	74.5	
38		634	"	69.4	
39		625	1,126	55.5	38年度
40		621	"	55.2	
41		650	"	57.7	
42		663	1,234	53.7	41年度
43		701	"	56.8	
44		702	"	56.9	
45		693	1,244	55.7	44年度
46		730	"	58.7	
47		715	"	57.5	
48		734	1,600	45.9	47年度
49		782	"	48.9	
50		885	"	55.3	
51		1,088	1,780	61.1	50年度
52		1,131	"	63.5	
53		1,192	"	66.9	
54		1,264	1,873	67.5	53年度
55		1,318	"	70.3	
56		1,353	"	72.2	
57		1,367	2,021	66.7	56年度
58		1,409	"	69.7	
59		1,477	2,110	70.0	58年度
60		1,484	"	70.3	
61		1,464	"	69.4	
62		1,505	"	71.3	
63		1,544	2,303	67.0	62年度
平成元年度		1,586	"	68.8	
2		1,614	"	70.0	

(1992年版『福生市商工名鑑』より転載)

個人または法人、その他の団体の利益を目的としてはならない、さらに特定の政党のために利用してはならないとの規定もされている。設立できる地区としては、原則として一つの市町村の区域となっているが、場合により二つ以上の市町村を区域とすることもできるとされている。

会員になれる資格は、地区内において引続き六か月以上営業所、事務所、工場、又は事業場を有するすべての商工業者ならば加入でき、加入、脱退は自由である。会員は会費を負担する義務がある反面、商工会の運営に参画、利用

する権利を有し、議決権、選挙権を有する。運営上の議決機関として、総会および総代会があり、執行機関として会長、副会長、理事で構成する理事会がある。現在、全国での商工会数は二八五九、会員数は一〇七万人、東京都では商工会数二九、会員数は約三万五〇〇〇人である。

福生市商工会 設立当時の会員数は六七四、市内商工業者数は九一四であったので、組織率は七三・七パーセントであった。以後平成四年一二月現在、会員数は一六六八で、創立当時の二・四倍の会員数に増加しているが、組織率は七〇・五パーセントとやや低下している。しかし、青梅市商工会議所への同市内商工業者の加入率が、約五〇パーセント程度であるのとくらべると非常に高い加入率といえる。もっとも、商工会議所と商工会とは組織の内容がやや異なり、商工会の方が、すべての中小規模事業者を含める色彩が強いことのちがいがかる、組織率の違いともいえる。

現在、福生市商工会の会費は、年額個人会員八四〇〇円、法人会員一万三二〇〇円である。個人の経営規模や、法人の資本金の額によって異なっているので、この額はいわば会員としての最低基準会費といえる。会の運営は、これら会費のほかに、国、都、市からの補助金で運営される。すなわち、商工会の職員給与、活動にかかわる一切の資金はここから支出される。会員へは会報などの情報サービスが提供されるほか、先端技術の講習会の参加などが認められる。

ところで、福生市商工会の創立以来の事業活動が、常にトップクラスを維持していることが認められ、昭和四五年優良商工会として三多摩地域で初の通産大臣表彰を受賞した。このような事業活動の活発化の中で、事業範囲も拡大し、事業量も会員数も増加してくる。しかし、事務所は当初町役場内にあったが、その後旧警察署、旧武陽信用金庫

などを転々とする。このような状況下、会館建設の必要性は多くの会員の痛感するところとなり、五三年七月、創立一七年目にしてようやく商工会館が完成した。これにより福生市商工業の発展を指導していく中核的機関として、地域社会全体の繁栄のためにも、商工会に寄せられる期待は大きい。

第二節 工 業

明治時代の 青梅や奥多摩、五日市などの山地には石灰石という地下資源が埋蔵され、青梅線、五日市線開設の誘因となったのであるが、地形的にほとんど平坦部を占める福生はそのような資源もなく、江戸時代か

ら明治、大正時代まで製糸業を除いては目ぼしい工業はなかった。しかし、平場の畑地一帯が養蚕地帯であり、農家の現金収入源として重要な役割りを占めていたことを反映し、製糸工場は早くから立地していたようである。明治二九年（八六）の役場の調査によると、当時、福生には五四戸の工業戸数が記録されている。当然のことながらそれらはほとんどが家内工業の小規模なものであった。このような状況の中で、製糸工場は笹本製糸、森田製糸、山八製糸、釜製糸の四社があった。その概要は次のとおりである。

工場名	工員数	動力
笹本製糸	一四一名	蒸気
森田製糸	二八九名	蒸気・水力
山八製糸	一二〇名	蒸気・水力

釜製糸

五二名

蒸気

『みづぐらいど・12』（小作寿郎「明治後期の森田製糸工場における労働事情」）により作成。（森田製糸の工員数は明治二七年、他は大正二年の数である）

同資料によって右四工場の沿革をみると、笹本製糸は福生村にあり、明治一八年（一八八五）三月笹本八太郎が創業し、汽機一つ六馬力を有していた。一方、熊川村には三工場があり、中でも森田製糸は森田浪吉が明治六年創業した西多摩郡内屈指の大工場であった。職工は男が一八名（内通勤は五名）女が二七一名で、こちらはすべて寄宿舎に入っている。汽機二つで一六馬力、水力二馬力を所有していた。同じく熊川村にあった山八製糸は、同二三年三月、森田治作の創業になる汽機二つ八馬力、水力三五馬力の工場であった。また釜製糸は同二三年五月、森田周蔵が創業、汽機一つ五馬力の工場であった。汽機というのは蒸気機関のことである。

いずれにしても、当時、一帯が畑作地帯であり養蚕が主産業であった西多摩地域ならではの工場であった。そしてここで生産された生糸の大部分は、横浜を通じ米国へ輸出されていたのである。

現在は一帯が住宅地化されている北田園、南田園は昭和四四年九月に区画整理事業が開始され、五〇年七月完成によって景観が一変することになったが、以前は蜆やバッタ、イナゴなどがみられる福生一の穀倉地帯であった。明治時代は、多摩川に沿ったこれら平坦な水田がつづき、やがて段丘崖で水田が終わり、そこを流れる用水路や玉川上水の分水が流れる段丘近くや、段丘崖下には至るところに水車が設けられて、米つき用、製糸用、煙草製造用などに使われていた。その数一五台といわれ、中でも穀類の搗挽用が一番多く一〇台であった。

大正のころ 大正四年（一九一五）、福生村の一部に電灯がつくようになった。このころになると、工業戸数も一六九戸と次第に多くなってくるが、目立ったものは明治時代からの製糸業のみで、他のほとんどは家内工業である。大正一四年の調査では、製糸工場は五社で、生糸生産量は一二六〇貫、明治時代にくらべると二分の一に減少している。

青梅線の開通や、明治三八年（一九〇五）羽村銀行福生支店が長沢地区に開設されたこと、明治四四年、福生郵便局の長沢地区への開局、そして大正四年に電灯がついたこと、同七年、福生郵便局で電報、電話事務が開始されるなど、まさに福生の文明開化時代といえる。

このような時代背景の中で、村民の衣食住の生活スタイルも変化してくる。事実、工業の業種に今までみられなかったものが出現してくるのである。すなわち、これまで比較的大規模な製糸業や、農家の女性が副業的に手動機織機（はたがり）で製造していた織物工業のほかに、こんにゃく、豆腐、精穀、製粉などの食料品製造業が一一軒に増え、蚕種製造業も一八軒に増える。また、衣服製造業の中で、仕立屋、足袋屋が六軒、そのほかシャツ、洋服類もつくられるようになる。これらの業種は、まだ旧来からの家内工業の延長線上にあるものであるが、印刷製本、製氷冷蔵、クリーニング業などが現われていることに注目させられるのである。しかし、大正末期から昭和のはじめにかけて、おし寄せてきた不況で、いちばん打撃を受けたのは製糸業で、世界最大の生糸市場、対米輸出の激減で、全国的に製糸工場の閉鎖が相ついだ。福生でも、森田製糸が片倉製糸の傘下に入り、ほかはすべて閉鎖されてしまった。

昭和から平成へ 昭和四年（一九二九）片倉製糸に吸収された多摩製糸工場（前身は森田製糸）では、昭和に入ってから生糸生産がつづけられていたが、太平洋戦争がますます激しさを増し、戦時体制が強化される中、つ

いに同一八年、航空機の機体製作に切り替えられる。やがて、米軍の本土爆撃が連日くりひろげられるようになる。空襲警報が発せられ、主要工場や軍需施設が狙われて爆撃を受けるようになる。二〇年四月四日未明、熊川南、内出地区に爆弾が投下され、数戸の民家の倒壊と死者三名を出したのも、近くにあったこの工場が軍需品を生産していたことによる。

戦後、福生飛行場が接収され、軍施設や米軍ハウスや住宅が建設されるようになると、建設業が急増してくる。さらに、戦災地復興や道路の改修などのためセメント、砂利、砂などの建築用材、土木用コンクリートの需要が伸びてくる。福生町は多摩川に近く、これら資材の入手が容易であることによる、コンクリート製品の生産工場が立地するようになる。また、明治時代に開設され、この地域一帯が養豚地帯であったことから発展してきたと畜場の近くに、戦後、ハム工場が開業するようになった。加えて、昭和三七年六月、首都圏整備法が制定され、福生町は市街地開発区域に指定された。これにより、羽村町に境を接する武蔵野台の一部は工業地域とされ、工業団地化が進められるようになった。このほか、江戸時代に創業し、時代とともに発展し、近代的装置を備え、三多摩全域は勿論、都区内や近県にも販路を有する日本酒の醸造工場が二社ある。

以上、明治から大正、昭和、平成へと福生市内の主要工業の推移を眺めてきたが、次にこれら工業について会社別に概説しておく。

① 片倉自転車株式会社

福生市熊川七二四番地にあった自転車工場。明治六年から創業していた森田製糸場（昭和四年多摩製糸と改称）を、昭和四年に傘下に収め、立地したのはじまりである。同工場は一時、二〇〇人以上の工員と、二〇〇釜を超える西

多摩郡内でも有数の製糸工場であったが、昭和一五年片倉製糸紡績株式会社多摩製糸所として正式に合併、片倉紡績株式会社の一事業所として営業してきた。一八年、戦時体制が強化されて、生糸生産は中止され、同年一月より航空機の機体製作に切り替えられた。すなわち立川飛行機の下請工場として多摩航空機製作所と改称され、航空機の増産を支援した。このころには工員を六〇〇人も雇用していた。終戦と同時に、航空機生産に使われていた工作機械と優秀な技術を、軍需製品から自転車生産に転換させた。平和産業への転身である。こうして生まれたのが、片倉シルク号であり、製品は日本の自転車業界の中で不動の地位を占めた。そのころの従業員は二七〇人、月産三〇〇〇台の製造能力を備える工場であった。その後、日本経済の回復とともに、国民生活も安定し、豊かになってくる。道路網の整備も進められる中で、二七年に片倉バイクの生産も併行して始められる。月産三〇〇台。そして、三〇年一二月、片倉工業株式会社より分離独立し、片倉自転車株式会社となる。三五年の従業員は一九〇人で、次のような各種車両を生産していた。

自転車	月産	三〇〇〇台
オートバイ	"	二〇〇台（一二五cc～二〇〇cc）
シルクセルベツト	"	八〇〇台（五〇cc）

生産工程は下請工場五〇社が作る各種部品を集め、組立てる方式がとられていた。特に片倉シルク号自転車の車体溶接は、アメリカより導入された低温溶接という技術が用いられ、車体が堅固である点の特徴であった。しかし、昭和四〇年代に入り、日本経済の発展とともにクーラー、カラーテレビ、マイカーが家庭に入ってくる。家具の電化時代の到来である。今まで身近かな交通手段であった自転車、バイクから自家用車へと消費傾向が変わってきた。この

ような時代の影響を受けて、二一年からつづけてきた自転車、オートバイの生産が中止され、六二年一月、工場も閉鎖された。この跡地には、東京都により宇宙に関する学習施設が近い将来建設される予定である。

② アサノポール株式会社福生工場

アサノポール株式会社福生工場は、アサノセメント株式会社の子会社として昭和二六年設立された。資本金は一億円、三五年当時は月産四〇〇〇トン、三六〇〇本のコンクリート製品を生産していた。工場所在地は福生市福生三二三番地であったが現在市営陸上競技場となっている。工場敷地は七〇〇坪、一五〇人の従業員を擁し、多摩川の砂利が豊かに使えたことと、原料であるセメントの運搬が容易であったことが、立地要因としてあげられる。

おもな製品としては、建築用具基礎材、河川砂防橋脚、地下鉄用コンクリート杭、柱の製造をおこなっていた。とくに、製造工程に特徴があり、原料の混合から型枠充填まで自動的におこなわれ、遠心製柱機は、長さ二〇メートルもあるコンクリート柱をわずか二〇分間でつくりあげる能力をもち、これが工場内に四基あり、昼夜通して生産していた。そして、日本工業規格表示許可工場であり、製品は三多摩一円、東京都区内や関東各県に出荷されていた。

昭和五二年福生工場閉鎖、全面的に瑞穂工場に移転、六〇年現社名の東扇アサノポール株式会社東京工場となる。

③ 福生コンクリート工業株式会社

昭和二五年に創立され、福生市福生三二五六で操業している会社である。おもな製品としてはU字溝、L形溝、汚水枡、雨水枡、V S側溝、マンホール、道路境界ブロックを生産している。従業員四七人をもつ日本工業規格表示許可工場であり、月産二〇〇〇トン、製品は主として東京都関係の土木用材として使われ、三多摩一円から神奈川県へも納品していた。

④ 日東コンクリート工業株式会社

昭和三年、原ヶ谷戸に設立された。従業員は四五人、主として建築用空洞ブロック、道路用資材を生産していた。ブロックの月産は六五〇〇個、道路資材は九〇〇トンで、東京都内を主な販路としていた。現在は移転しているがその移転先などは不明である。

⑤ 松菱コンクリート工業株式会社

昭和十一年設立された改良便所一式を生産していた工場で、四〇年代に工業団地に移転、五〇年代半ば頃まで操業していたが、現在どこに移転したか不明である。とくに改良便所は、水洗式便所を除いた便所としては優秀で特許を有し、建設省標準設計の中にも加えられていた。従業員二五人、月産五〇〇個で、都内や近県に販路をもっていた。

福生屠殺場

立地の経緯

福生市福生三一二番地に昭和三年四月より営業開始され、四七年三月に閉鎖されるまであった市営（三二年当時は町営）の屠殺場である。この屠殺場の前身は明治時代にさかのぼり、約七〇年近くの歴史を持つ、多摩地区でも由緒のある屠殺場であった。以下、概略を書き、記録として残しておくたい。

もともとこの屠殺場は、現在の加美に開設された私設屠殺場であった。明治四〇年ころのことと推察される。しかし、屠殺場規則が改正されたことにより設備が不備とされ間もなく閉鎖されてしまう。そのころの屠殺場は、東京府により一郡一個所しか許可されない時代であったため、せっかく福生で得た権利が解消されてしまうことを憂慮した田村半十郎、田村半左衛門、八巻善七、笹本半左衛門、村尾半助、村野和十郎、田村八郎、笹本金作の八名が、あくまで村に権利を保有しておくべきだという考えから、明治四一年（一九〇八）出資し、合資会社福生屠殺場を福生七九四

番地（停車場の東北）に移設し、田村一作が管理者となって営業を開始した。

立地の背景 なぜ福生村に屠殺場を開設したのか資料もなく、関係者もない今となっては詳しいことはわからないが、市内でハム工場を経営し、最近まで活躍していた（後述）高橋三郎などからの聴取調査によって推察し、記述してみよう。

第一は、明治二十七年二月一九日に開通した青梅線が、同二二年三月にすでに開通していた甲武鉄道と結ばれたことにより、福生や西多摩地域と東京府内との結びつきが強まったため、福生村が西多摩地域での玄関口としての地位を占めるようになった。そのために、いち早く進取の気性が強まってきたことがあげられる。

第二は、当時武蔵野台地上の畑作農家に養豚業導入の気運が普及していたのではないかということである。これについては、次のような農業経営上の背景があったのである。すなわち、福生村をはじめ、西多摩地域は養蚕地帯であったが、生活水準の向上により、より多くの現金収入を得る必要にせまられていた。

武蔵野台地は火山灰地帯であり、地味はやせている。前述のごとく、当時福生村では養蚕、小麦が換金作物として重要な位置を占めていたが、その増産のためには良質の堆肥の確保が不可欠の条件であった。養豚の導入は堆肥の増産、豚肉の販売に結びつき、現金収入の増加につながる。その上好都合なことは、養豚導入のための資金は、乳牛や馬の導入にくらべ少額の資金で済み、しかも家庭で毎日出る残飯なども飼料として活用でき、加えて比較的短期間で換金化できる有利性もある。このようなことが、当時の畑作農家に養豚の風潮を広めていたのではないか、そのような養豚農家の存在が、背景にあっての屠殺場の誘致開設であったと考えられる。

草創期の屠殺場

開設間もないころの屠殺場の資料が、市内の旧家より発見された。「屠畜台帳」と題されている

この資料によって、明治末年の屠殺場の概要を見てみよう。

それによると、明治四四年一〇月の屠殺数は六二頭で、開場は四日に一度というぐあいであった。この屠番台帳には、入荷先も記入されているが青梅町・五日市町・西多摩村（羽村市）など近在の町村からであった。交通事情からして当然であろう。さらに大正元年（一九三）九月は合計一八頭しか屠殺していない。大正一一年一二月をみると、豚一五一頭、馬六頭、牛一四頭の合計一七一頭で、月による変動はもちろんあるわけであるが、概略西多摩地域に養豚が普及してきているようすがわかる。この傾向は昭和に入ってもつづいていく。

成長期の屠殺場 昭和一四年、この福生屠殺場は高橋三郎に引き継がれる。高橋は平成四年まで市内でハム工場を経営していたが、平成五年二月故人となられた。つぎにその経緯をまとめてみる。高橋の父親も他所で屠殺場を経営しており、そこで働いていた関係で、福生屠殺場の経営内容はよくわかっていた。そのころ東京府下には五つの屠殺場があった。

中でも福生屠殺場は古く、東京芝浦の屠殺場に次ぐものであった。この屠殺場の経営を引き継いだ高橋は、屠殺日を増やすことを申請し、それまで四日に一度であった屠殺日を、毎日可能なように許可された。この結果、多い日で五〇～七〇頭、少ない日でも三〇頭の豚を屠殺するようになった。

豚などの入荷先 参考までに、福生屠殺場への入荷先についてふれておく。そのころは、まだ自動車が普及していなかった時代であったため、豚や牛は「豚屋さん」と呼ばれた仲買人が農家から朝早く買い付け、リヤカーに積んで運んできた。当時の西多摩地域の豚屋さんの数を高橋の記憶によって再現すると次のとおりである。

福生四軒・瑞穂六軒・羽村三軒・青梅二軒・五日市三軒・秋川二軒・奥多摩二軒

表 VI-57 西多摩郡内の畜産

(昭和10年)

町 村 名	産 額(円)
福生村熊川村組合	66,051
西多摩村	23,592
箱根ヶ崎村他組合	22,690
多 西 村	20,128
平 井 村	5,699
東秋留村	8,140
西秋留村	32,646
増 戸 村	8,463
大久野村	7,295
戸 倉 村	6,492
小 宮 村	2,445
五日市町	5,167
檜 原 村	2,688
霞 村	12,795
小曾木村	18,775
成 木 村	3,735
青 梅 町	11,535
調 布 村	8,958
吉 野 村	6,483
三 田 村	7,562
古 里 村	4,878
氷 川 村	10,034
小河内村	2,698
計	298,951

農家も多かったと考えてさしつかえなからう。なお山場と平場のちがいをみると、平場の町村に多く、山場で少ないことも指摘でき、前述したような平場の地域における農家の、現金収入確保との関連から考えても支障はないであろう。

ところで、時代の経過とともに福生屠殺場への出荷先は、現在の埼玉県所沢市・都下武蔵村山市・東大和市・八王子市域というように漸次拡大されていく。搬送方法もリヤカーからオート三輪車へと変化する。

公営へ移管 昭和二〇年八月、終戦を迎え、翌年八月には福生飛行場は名称を米軍横田基地と変える。福生飛行場の新たな出発である。福生町もこのころから都市的様相への衣替えも、一段と加速される。

一方、福生屠殺場は、施設の老朽化が進み、市街にあることも加わって汚水処理や環境衛生の面、さらに食肉衛生上から、公営屠殺場建設の要望が高まってくる。そして、昭和三十一年、町では町営屠殺場を福生三一二番地に建設

すなわち瑞穂にいちばん多く、六軒あった。このことは、瑞穂が西多摩有数の養豚地帯であったことをうかがわせる。この豚屋さんの背後には、当然養豚農家の存在があるわけで、豚屋さんの数が多いということ、それを支える養豚

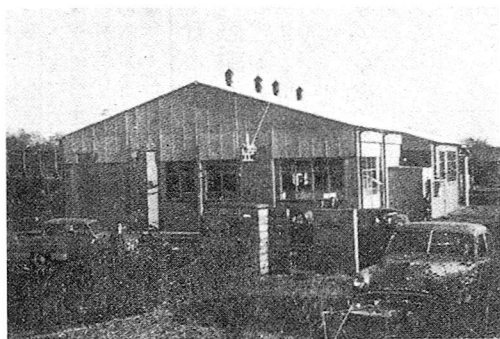


図 VI-41 福生町営と場完成 (昭和32年)

することになった。三十二年一月二十九日の町議会定例会で福生町と畜場使用条例が制定され、つぎのように解体料などが決められた。

と殺解体料

一 牛馬一頭につき

四〇〇円

二 犢豚一頭につき

二二〇円

三 山羊、めん羊一頭につき

五〇円

そして、翌三十二年一月一五日号の福生町広報に、次のような記事が掲載された。

福生町営と場完成

福生町には、以前から私営のと場があり、畜産の振興に大きな貢献をしたが、町の発展と共に付近に住家が密集し、環境衛生上、憂慮されてきた。

(略)

そこで、昭和三十一年に起債を得て第一期工事に着手し、続いて三十二年には八〇〇万円の起債を許可され、去る五月より第二期工事を進めてきたが、十二月十一日、落成をみたので十六日から開業し、年末需要期に多大の成果を挙げている。

この施設は、一日に小動物一五〇頭、大動物五〇頭の処理能力を持っている。設備は近代化され、高架、軌条による自動機械操作や電殺機、電気鋸が

表 VI-58 と場特別会計状況

年 度	歳 入	歳 出	差 引 額
S.32	12,941,000	12,903,000	38,000
33	10,901,000	10,626,000	275,000
34	10,504,000	10,382,000	122,000
35	7,938,006	7,696,576	241,430
36	9,023,220	8,327,173	596,047
37	14,325,137	14,074,728	250,409
38	16,450,069	16,200,628	249,441
39	18,325,206	18,157,296	167,910
			(一般会計へ 390 万円繰り出し)
40	25,094,033	20,430,694	4,663,339
41	43,593,924	36,297,394	7,296,530
42	32,493,386	24,180,379	8,313,007
43	30,401,527	29,028,333	1,373,194
44	32,088,000	31,831,000	257,000
45	—	—	1,580,000
46	32,146,000	33,681,000	535,000(—)

(『みづぐらいど・11』より転載)

発することになった。この公営と場はその間、フル操業し、その差引額の中から四〇年度四〇〇万円、四一年度三〇〇万円、四二年度四〇〇万円、そして四三年度には七五〇万円もの金が、一般会計予算に繰入金として組み入れられている。このように、福生と場は健全財政団体へむけて努力していた折、町の歳入の一部を支えるため懸命に稼働していたことがわかるのである。

しかし、その後の東京都区内、三多摩地域での人口増加は目ざましく、東京都だけに限定せず、首都圏というより

整備され、流れ作業によりスムーズに処理されるよう設計されている。(略)

町営化されたあとの収支状況を表にして掲げてみた。三九年以後四二年度までは黒字の額が激増している。これは、食生活の向上にともない、と畜数がと場開設以来最高の四万三四一〇頭、年間開場日数三〇二日と伸びたためである。

福生町は昭和三九年度、町財政に約一億円の赤字が生じたため、四〇年度より地方財政再建促進特別措置法の適用を受けた。この期間は当初、四四年度までの四年間の予定であったが、四二年九月末日で解除され、一〇月一日より健全財政団体として再出

広域的な見地から、人口の調和がはかられた開発の必要性が考えられるところとなり、三一年首都圏整備法が制定される。福生町のほとんどは市街地開発区域に指定され、三八年一〇月に加美平地区開発事業が着手され、東京の衛星都市としての性格が強まってくる。

四四年九月には、福生町に残された最後の未開発地域であった多摩河原一帯の区画整理がはじまった。このような社会情勢の中で、福生と場も閉鎖に追いこまれていく。

四七年三月一日発行の「広報ふっさ」（四五年七月一日福生町は市制を施行）に次のような記事が載った。

福生と畜場は三月で廃止

多摩河原にある福生と畜場は、三月いっぱいまで廃止することになりました。昭和三十一年十二月に開設以来、たいへん多くの方々にご利用いただきましたが、施設の老朽化をはじめ、最近の公害問題や財政運営の困難さなどから、廃止のやむなきに至ったものです。

このと畜場が閉鎖されるに際しては、町の当事者もあれこれ努力したようで、このことについて、当時町長であった石川常太郎が著書『回想』「五阡八百四拾日」の中で、つぎのように書いている。

私は昭和三九年度予算を受け継いだのですが、予算書に奇妙なところがありました。それは、町営屠畜場の経常利益が計上される一方で、同じ屠畜場の売却収入が計上されておりました。苦しい財政でしたので、とにかく屠畜場の買手を捜すことが一番の仕事になりました。民間で買ってもらって、経営を引き継いでもらおうというわけです。当時、福生町も農村型から都市型へと町の形態も脱皮の最中でした。すでに養豚農家も徴々たるものになってきておりました。町長になりたてでして（昭和三九年五月一九日の福生町長選で当選、戦後の公選制後

町長となった岸徳次郎、加藤市蔵、森田幸造、秋山誠一、瀬古清蔵につづき第六代の町長となった）、町長とは随分いろいろな事をやるものだといふはてました。

屠畜場を経営される方を見つけ出すことは、とても難しい仕事でした。私自身、全く今まで係わりのない仕事でしたので、どこから手をつけてよいものやら見当が付きません。埼玉県方面へ行けば何とかなるという話を聞き、埼玉県下の市町村をあちこち回りました。

しかし苦勞はすべて無駄でした。ただ一度、川口市役所でブローラーの加工業者と交渉を持ちました。結果は交渉決裂。全くの徒勞でした。買手がつかなかった理由は、時代遅れの商売ということでしょうか。公害問題も出はじめる。都市化による農業の衰退で採算も取れない。等々……

この屠畜場は、結局、売却ならず、なおも経営を続けましたが、昭和四七年三月末をもって閉鎖いたしました。今にして思えば、買手がなくてよかったと思っています。その後、財政危機を乗り越え、今は健全財政を維持できているのですから。いつか、この跡地も立派な公園にでも生まれ変わることでしょう。

かくして、明治以来、約一世紀間、西多摩地域の畜産振興に大きな役割を果たし、またそれを背景に営業をつづけてきた福生屠畜場も終止符を打った。

① 株式会社福生ハム 福生市福生七八九番地

昭和二三年一月、福生市本町四八番地に高橋三郎が福生食品工業株式会社を創業したのに始まる。

高橋は福生屠殺場の項で述べているように、一四年福生屠殺場の経営を引き継ぎ、三二年一二月に町営と畜場が下河原に開設されるまで、福生七九四番地でと畜場を経営していた。後述する大多摩ハム小林商會が品川区内より移転

してくるに当っては援助を与えている。父親が古くから三鷹で屠殺場を経営しており、同業の粕江の屠殺場経営者がハム工場を開設するときには相談を受けたくらいハム製造について以前から独学で研究していた。たまたま、小林栄次が、昭和二年六月、大多摩ハム小林商會を福生に開業したのに刺激され、前々から同じ志を持っていたことであって開業したのである。二二年七月のことであった。

当時、ハム工場を経営するポイントは、原料である枝肉の入手が容易であること、とくに実際に枝肉の状態を自分の目で見、確かめることが必要であったことにもより、屠殺場の近くに工場を立地することが絶対に必要条件であった。その点、高橋は自分で屠殺場を経営していたわけであるから、製品の市場面の見通しさえ立てば、いつでも決断できたわけである。しかも、幸いなことに、開業と同時に、前記粕江のハム工場の職人たちが率先して退職し、移ってきてくれたのも大きな助力になった。

昭和四四年一〇月、現在地に工場を新設移転し、社名も株式会社福生ハムに変更、現在に至っている。資本金は一五〇〇万円、従業員数二七名を擁し、ロースハム、ボンレスハム、ベーコン、各種ソーセージなどを製造し、福生市内のほか、多摩地区一四市町村の学校給食センター、都立高校五校の学校給食、そのほか民間企業や食肉小売店に納品するなど、品質は好評を博している。

② 株式会社大多摩ハム小林商會 福生市福生七八五番地

創業は昭和七年（一九三二）六月、長野県出身の小林栄次が品川区荏原に小さな作業所を作り、ハム製造を開始したのにはじまる。林屋ハム兄弟商會という名称の工場であった。開業までのいきさは、一五歳で上京し、日本におけるハム、ソーセージそのほか食肉加工業界の功労者ともいふべきドイツ人技師、アーグスト・ローマイヤーの経営する

周辺市との比較

(平成2.12.31現在)

木材・木製品		電 気 機 械		輸 送 機 械		精 密 機 械	
工場数	従業員数	工場数	従業員数	工場数	従業員数	工場数	従業員数
2	x	32	431	12	214	11	184
2	x	66	1,213	13	200	15	70
3	10	34	4,622	2	x	15	820
32	138	135	7,491	45	791	39	668
6	30	86	6,266	42	2,532	23	260
9	36	69	1,275	11	78	13	108

(資料工業統計調査報告)「平成3年版としとうけい」による

ハム製造工場に入社し、ハム製造の技術を直伝された。このローマイヤーは日本ではじめてロースハムを作った人であり、このことは日本の食肉加工業にとって一大革命ともいえるべきことであった。

小林の工場は、太平洋戦争中は陸軍航空審査部の指定工場となる。そうして、軍関係の病院や日赤などへも製品を納入するようになる。ところが、空襲により荏原工場や自宅が全焼したので、航空審査部を訪ね、工場用地を見つけることになった。たまたま、飛行場から二キロメートル離れた現在地に一〇〇〇坪の土地を借用することに成功した。そのうちに終戦となってしまったが、昭和二年福生で本格的にハム作りをはじめたのである。なお、この用地取得にあたっては、福生屠殺場を経営していた高橋三郎のアドバイスや、仲介が大きな力となっている。二年六月「小林ハム商会」を設立、やがて二四年八月にはGHQの指定工場になる。これが日本で最初のGHQ指定工場である。

昭和四七年一月、無添加ハム、ソーセージを開発、発売した。それ以来現在まで、純ドイツ式製法により、手造りハム、ソーセージ、ベーコンを生産している。このように発色剤や合成保存料などは一切使用せず、自然の味を出すことに心がけていることをセールスポイントにしている。現在、資本金三〇〇〇万円、従業員五五名(ほかにパートタイマーなどが約二五名)を有し、高級ハムとして

表 VI-59 工場数・従業員数の

市 別	総 数		食 料 品		織 維		衣 服	
	工場数	従業員数	工場数	従業員数	工場数	従業員数	工場数	従業員数
福 生 市	151	2,205	10	295	—	—	3	8
立 川 市	414	5,899	44	822	2	ㄻ	21	110
武蔵野市	197	6,998	25	284	2	ㄻ	9	46
青 梅 市	758	15,308	45	766	28	284	28	390
昭 島 市	462	14,192	27	946	12	213	20	276
秋 川 市	193	2,957	1	ㄻ	—	—	3	81

ㄻは秘匿数

手堅い販路を持っている。

周辺市との比較 つぎに、平成二年二月三十一日現在の福生市の工場数、従業員数、製品出荷額を立川市などの周辺五市と比較してみよう。

すなわち、工場数は一五一、従業員数二二〇五人で、両方とも六市中最少であることがわかる。これを都下にある二七市の中でみても、工場数は清瀬・多摩・国立・小金井・国分寺・保谷・田無の各市について八番目、製品出荷額でも国立・清瀬・多摩・保谷・国分寺・小金井の各市につづいて七番目であり、工業活動は低調な市であることがわかる。これを青梅市とくらべると、工場数、従業員数ともに七分の一でしかなく、製品出荷額に至っては一六分の一である。福生市内には、いかに工場が少ないかがわろうというものである。このことは、武蔵野台工業団地などごくかぎられた地域をのぞき、都市近郊型の大企業が立地できるほどの、工業用地がないというのが大きな理由である。そのような点から考えるにつけても、市域の三分の一を占める横田基地の存在が、大きな影響を及ぼしているのである。

工場の推移

昭和三十九年以後の福生市内における工場数および従業員数、出荷額を追ってみよう（表VI-60）。

これによると、四三年までは大きな変化はないが、四四年に工場数は三一、従

表 VI-60 工場の推移

(各年 12. 31 現在)

年 度	工場数	従業員数	出 荷 額
昭 39	54	934	百万円 2,201
40	58	1,062	2,609
42	83	1,182	3,768
43	91	1,418	4,811
44	122	1,975	8,025
46	99	2,031	9,644
48	116	2,194	15,946
50	113	1,901	16,519
52	109	1,788	20,571
54	118	1,833	20,930
56	87	1,849	26,679
58	161	2,311	31,999
60	162	2,404	34,475
62	101	2,209	38,196
平 1	101	2,126	45,435

従業員数は五五〇人、出荷額も前年の約二倍へと大きな増加を示している。この現象の背景には、前述のごとく、武蔵野台工業地区への工場の進出と、それらの工場がフル操業したことによるものと思われる。以後、平成二年に至るまで、多少の変動はあるものの、工場数、従業員数とも横ばいの状況である。しかし出荷額は確実に増加していることがわかる。これは、設備の更新などによる生産性の向上によるものと思われる。

種類別にみた 工業の消長

最後に産業中分類による福生市内の工場数、従業員数を見てみよう。期間は昭和四〇年から六〇年の間である。すなわち、四〇年には工場数、従業員数とも輸送用機械、窯業・土石、食料品、家具・装備品、金属製品がベスト5であった。このころはまだ片倉自転車工業株式会社、アサノボール株式会社などの輸送用機械、コンクリート工業、それに大多摩ハム小林商会、福生ハムの工場が福生町内では工業の主たるものであった。しかし、一〇年後の五〇年には窯業、土石や家具、装備品で従業員数が減少し、代って一般機械、紙、紙加工品、電気機械が成長してくる。

さらに、六〇年には出版、印刷が増え、反対に窯業、土石や家具、装備品がいちじるしく減少する。このような傾向は、近年のモータリゼーションの中の自家用車の普及やパソコン、ワープロなど精密機械が職場や家庭に導入さ

第2節 工 業

表 VI-61 産業中分類別工場数・従業員数の推移

(各年 12.31 現在)

年中分類 工場数 従業員数	40 年		50 年		60 年	
	工場数	従業員数	工場数	従業員数	工場数	従業員数
総 数	58	1,062	113	1,901	162	2,404
食 料 品	9	174	7	187	9	196
織 維	2	<i>x</i>	—	—	—	—
木 材 木 製 品	1	<i>x</i>	—	—	2	<i>x</i>
家 具 装 備 品	8	123	11	87	7	18
紙・紙加工品	1	<i>x</i>	5	252	2	<i>x</i>
出 版・印 刷	1	<i>x</i>	9	38	11	208
窯 業・土 石	5	293	4	170	2	<i>x</i>
金 属 製 品	10	68	17	95	23	160
一 般 機 械	3	23	16	259	25	396
電 気 機 械	2	<i>x</i>	15	134	39	470
輸 送 用 機 械	15	308	15	293	14	265
精 密 機 械	—	—	3	101	9	121
そ の 他	1	<i>x</i>	11	230	20	170

—は皆無 *x* 秘匿数字

れつつある状況、情報化社会を反映した印刷、出版界の成長など、日本の社会の変化に対応した動きとしてとらえられるのである。

業 福生の酒造

江戸時代から福生では酒造業が営まれ、現在に至っている。市内にある二つの

酒造場は、三多摩地方を代表する地酒として好評を得ている。これら二つの酒造業の成立経過、歴史的発展の経緯については別項で詳述されているので、ここでは現況を中心に概説するに留めておく。

① 石川酒造株式会社

福生市熊川一番地

創業は記録によると、江戸時代の文久三年（一八六〇）に始まるとされている。今から一三〇年ほど前のことである。もっとも、当時の酒造場は多摩川の対岸の小川村（秋川市）にあった。現在地に移ったのは明治一四年（一八八一）蔵が新築されてからで、同一六年のことであった。創業当初の商標名は「八重桜」であった。これは当時、小川村にあった森田酒造の商標名が「八

重菊」であったので、これと姉妹関係を示し命名されていたわけである。現在の「多満自慢」となったのは、昭和八年（一九三三）からである。明治二十二年二月にはビールの醸造もしている。その名称は「日本麦酒」で、東京や横浜方面へも売り出したが、二年後の二三年、製造を中止した。一時は年間三〇〇石のラガービールを醸造した。

酒造に欠かせないのは、原料の米、良質の水、そして仕込みの技術である。原料の米は、新潟県産が七割、残りの三割は岡山・兵庫・長野県産を使っている。いずれも、食用の米より粒が大きい酒造好適米といわれるものである。酒造用の水は、地下一五〇メートルに及ぶ井戸から汲みあげたものを使っている。この水は醸造用ばかりでなく、洗浄など一切のものに至るまで使用している。仕込みの技術は、新潟県中頸城郡より杜氏（酒造工程すべての采配をふるう責任者。蔵人と呼ばれる技術者を統率し酒造に当る）一名と蔵人一名が、一月初旬より四月まできている。平成四年の醸造量は一万三〇〇〇石で、これは一・八リットル瓶で一三〇万本にあたる。主たる販路は三多摩地域が七割、都区内に一割、残りは神奈川、千葉、埼玉などの近県である。そして多摩地区では、青梅市にある小沢酒造と並ぶ醸造量の多い地酒である。

ところで、この石川家は、江戸時代から昭和に及ぶ大量の資料を所蔵していることでも知られている。そのうちの古文書類は整理され、昭和六〇年一〇月に『多満自慢石川酒造文書』として刊行され、現在まで第六巻が出版されている。平成四年一月には、これらの資料を公開するため「ぞく雑蔵史料館」が工場敷地内に開館されている。そしてここでは、単なる所蔵文書の館内展示だけではなく、わが国や外国から有名な奏者を招いたコンサートなども企画演奏され、好評を得ている。雑蔵史料館および酒造場の見学は、一月第二日曜日に一般公開される。参考までに、平成四年のその日には、一日で二二〇〇名が訪れている。そして、その日以外は、電話予約で公開している。年間の見学者

は四〇〇〇名、五〇〇〇名。平成四年一二月の従業員数は杜氏、蔵人を除き六〇名である。

② 田村酒造場 福生市福生六二六番地

清酒「嘉泉」の醸造元である。現在の当主は第一五代。田村家は代々名主総代を務めていたが、第九代目当主が文政五年（一八三三）に創業したのが始まりとされる。

田村酒造は、江戸時代から明治中期まで、武州一帯（現在の多摩地区と神奈川県や埼玉県の一部）にあった二四蔵の総本店として、経営面、技術面を援助、指導してきたほどの酒造場であった。商標「嘉泉」の由来は、創業当時敷地内で苦心して掘り当てた井戸が、酒造りに最適の水質（中硬質水）で水量も豊富であったことから、喜ぶべき泉として「嘉泉」と命名したとされる。現在は深さ約二〇メートルの井戸二本を使用し、仕込みから洗浄まで一切に使用している。

杜氏および蔵人は昭和四七年までは新潟県内よりきていたが、将来的に新潟県内からきてもらうことについて、人材不足が予想されたことと、関係官庁の奨めもあって、昭和四八年より岩手県北上市・花巻市より招いている。南部杜氏と呼ばれ、越後杜氏とは微妙な点で違いがある。

原料の米は新潟県産の五百万石、長野県産の美山錦、広島県産八反錦、岡山県産曙、兵庫県産山田錦を使っている。いずれも酒造好適米といわれる粒が大きい軟質米である。現在の醸造量は二〇〇〇石、一・八リットルびんで二〇万本に相当する。

販路は三多摩地域が中心で、都内にも多少出荷するが、近県への出荷はごく微量である。とくに、当酒造場では、創業以来、一貫して「丁寧に造って、丁寧に売る」ことを信条にしている。一七〇余年にわたるポリシー（哲学）で、



図 VI-42 完成まぢかな加美平団地（昭和41年）

心意気ともいえる。地酒は、その土地の人々の食べ物に密着して、味ができあがっている。例えば、戦中戦後の砂糖を中心とした甘味料の不足した時代には、酒の味は全国的に甘口になり、糖分が多いものが喜ばれた。日頃不足している糖分を、酒によって補う意味合いもあったからであろう。このように、地酒はとくにその土地の人々が、郷土料理に合うような味が作られてきたもので、郷土料理とワンセットになった芸術品なのである。当酒造場で頑^{かたく}なに守っていかうとしている嘉泉の味は、それである。

平成三年現在、従業員は三五人。一四年間連続して優等賞に輝く品質は、東京・千葉・神奈川・山梨県内ではほかに例がない。

武蔵野台 工業団地 昭和三十一年（一九五六）に首都圏整備法が制定され、八王子・日野・町田・相模原（神奈川県）の各市が市街地開発地区に指定された。つづいて三七年六月には、青梅市・羽村町・福生町も同地区に

指定された。このうち福生町では、総面積の約三分の一が横田基地に接収されている関係と、さらに二〇年代後半から三〇年代はじめにかけて、外人ハウスブームによって開発されたため、羽村町と境を接した加美平、武蔵野台地区しか開発可能な用地はなかった。そのうちの武蔵野台一帯を準工業地域に設定し、工場を積極的に誘致することにした。

前述したごとく、地下資源などのほとんどない福生市では戦後、コンクリート工業、ハム工業が創設されたほかは、

家内工業的な工業を除き、近年まで工場はなかった。したがって、面積的には広くはないが、福生市内における唯一の工業地帯が武蔵野台工業地区である。ここに、昭和四三年二月、トッパンムーア株式会社が進出し、同四三年五月には塩谷製作所（現社名エンヤシテム株式会社）など一八社が進出を決定した。その中から実際に進出したのは前記二社のほか、美虹工芸、ムサシノ化学、交運社、関東照明、愛国電線、日本蓄電池、岩谷産業、千代田光学、昭和製作所、日本電池、東和コンクリート工業、坂本ハガネ、竜土工業、小松製作所、東電の一七社であった。このうち現在引き続いて操業しているのは、ムサシノ化学、千代田光学、日本電池、竜土工業、東和コンクリート工業を除く一二社であり、東和コンクリート工業が所在していた区域は、その後境域が変更され、現在は羽村市に属し、コニカが跡地で操業している。

以下、現在、稼働している工場の中から株式会社エンヤシテムとトッパンムーア株式会社をとりあげ概説する。

① 株式会社エンヤシテム 福生市武蔵野台一ノ二四ノ八

高度情報化時代の花形産業は電子機器工業、その製品の心臓部には半導体集積回路が使われている。その集積回路は近年ますます微細化がすすむ。それだけに、その製造過程はクリーン化が要求され、ほこりが極端に嫌われる。今や電子機器工業界では、清浄度の高い環境と、自動化技術のさらなる開発が要求されるミクロと省力化に対する戦いとなっている。このような最先端技術を駆使して製品を造る電子機器工場で使う機械を製造しているのが当社である。

創業は明治二三年（一八九〇）三月、日本橋室町で精密標準温度計、硝子製計量器および理化学機器の製造販売を始めたのが最初である。当時の社名は塩谷製作所。昭和二七年八月、トランジスター用ゲルマニウム素子の前処理装置の製造販売を開始し、つづいて同三二年、小平市学園西町に理化学機器工場を新設、半導体前処理エッチング装置の試

作機を完成する。

こうして、半導体製品を製造する工場が使う装置をつくるメーカーとしては元祖的存在となる。それだけに、当社で技術を身につけた社員が、新しい会社を創り、独立していくという事例も多く、人呼んで「塩谷学校」ともいわれるほどである。福生市に進出したのは昭和四三年五月、福生町の時代で武蔵野台工業団地が造成されたときである。それまで操業していた小平市内の用地が狭くなってきたためで、当初の福生工場の従業員は二〇名ほどであった。五年、小平市より本社を川越市に移転し、研究開発事業部を設立した。六〇年一月には、福生事業所新社屋が完成する。そして、平成三年一月より社名を改め、株式会社エンヤシステムとなる。資本金一億二二〇〇万円。現在、福生事業所だけで従業員は七二名、平成四年度の売上高は二五億円である。

前述したように、当社の製品は半導体製造のための装置（機械）をつくることであり、日立や富士通などから注文を受けて、装置を設計し製造する特注生産である。したがって、同じ製品を何台も造るというものではない。一品料理の生産である。一般市民を対象とする商品を作るのではなく、しかも一品料理の生産工場であるだけに、市民への会社の知名度は低い。しかし、日本の最先端技術をいく工場も、当社の機械製造技術がないと稼働できないのであり、まさに縁の下での力持ち的存在の会社である。福生・羽村・青梅・瑞穂一帯は東京のシリコンバレーと呼ばれるほど、半導体関連工場が多い。当社もその一翼を担って今日も操業している。

② トップラン・ムーア株式会社 福生市武蔵野台一ノ二六ノ一

昭和五〇年代はじめに、将来の高度情報化社会、とくにコンピュータの普及を予見し、それに対応した製品開発に、とり組んできた企業である。当社は、各種伝票用紙を企画、製作し、さらにその伝票用紙に種々の情報を印刷し

「情報の器」として情報入り伝票を生産している工場である。

創業は昭和三〇年五月。印刷技術を誇る凸版印刷株式会社と明治一五年カーボンを利用し、世界最初の複写式伝票を開発したカナダのムーア・コーポレーションの合併で、三鷹市内に設立した会社である。旧社名はトッパン・ムーア・ビジネスフォーム、日本で最初のビジネスフォーム専門会社である。当時は二四時間操業の二交代制で、五〇人ほどの社員であった。福生に全面移転したのが昭和四三年二月、武蔵野台工業団地一帯は一面のススキの原で、夜勤後の社員が青梅線近くの寮に帰るとき、よくタヌキに会ったこともあった。四六年、社名をトッパン・ムーア株式会社に変更し、現在に至っている。

ビジネスフォームとは各種伝票類のこと。銀行、保険、証券、流通、電気、ガスなどの私企業や公企業では、業種や用途に応じた伝票が使われている。さらに、私たちの家庭に送られてくる電力やガスの検針票、料金票、クレジットカード会社からの請求書など、全国に普及している宅配便の配送伝票など、あげればきりがなくらい、日常生活の至るところに伝票類が使われている。これら各種伝票は、発注先の考えを取り入れ、用途に適した伝票用紙が作られ、それに注文主より依頼された情報を整理、加工印刷して入れ、しかも発送するまで扱うように近年の印刷会社の内容は変わってきているのである。当工場では、統一された形式の伝票用紙に一枚一枚異なったデータを印刷する、まさにコンピューター社会ならではの考えられない時代の最先端技術を印刷技術に生かしている工場である。

福生への移転の背景には、三鷹工場が手狭になったこと、首都東京の近くで交通の便がよい場所に、立地を望んだことがあげられる。当社では、福生移転と同時期に日野市でも操業を開始している。そして、国内に福生・日野・大阪・摂津（大阪府）・熊本の五つのメイン工場のほか、その周囲に中小の衛星工場を有する。当初、二交代制であっ

た勤務体制も、現在は三交代制で二四時間操業である。平成四年二月現在、資本金は七五億円、売上高一四八五億円（平成二年度）、従業員二八〇〇名、うち福生工場の社員は二六〇名、ほかにパートタイマー約一〇〇名がいる。